
果てない夜、主題は銀の月

風月英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果てない夜、主題は銀の月

【Nコード】

N6091C

【作者名】

風月英

【あらすじ】

奪うほど失っていく。死をもたらす者の世界。

一、彼女と彼と（前書き）

掲載中の短編小説「彼女の言葉は真実か」「彼女の言葉の裏側に」
「彼女の彼女の彼女の、」続編です。宜しければ先に前三編ご一
読下さい。

一、彼女と彼と

いつそ絶望するほどに四面楚歌なら清々しい。それならあなたに謝りたいと思ったりはしないだろう。

それは言うなれば、心の三分の二くらいをこっそり抜かれたような感覚で、けれど残りの三分の一は相も変わらずそよとも揺れない。

とても簡単なことだ。三分の二は生きていて、残りは死んでいる。

ミナミ、リク。彼から何もかも奪ったのは私で、恐らくそれと同じに何かを無くしたのも私だ。

私は死神で、彼は生者だった。それだけの理由。

『オカルトに興味ねーんだ』

耳に残っている、声。私だって興味がない。あの日もしそう言ったら、彼はその矛盾を理解しただろうか。

私は死神で、あなたの魂を奪いに来て、だけど私は死神なんて信じていない。まるで笑えない、冗談にすらならないそれは、真実だと。

「ミナミ、リク」

自分が発した綺麗なはずの音の羅列は、そのまま私が発したことによって色褪せてしまう。鮮やかな色彩が入り乱れているはずの、今上空を埋める夕日を掲げた空は、とても殺風景で乾いている。莊嚴で美しいが故に、私も私の罪も、取るに足らないと一笑に付されるように。

一笑に付す？ まさか。

私は死神を信じない。死神は死神と形容されることで咎めから解放される。当事者の私からすれば下らないにも程がある。やっているのは何のことはない、ただのひとごろし。正当に裁いてくれる神は存在しない。

「詩月」

シヅキ。本人すら愛着を持っていない私の名を、繋ぎ止めるように優しく呼ぶ声が聞こえた。振り返れば夕日のオレンジに染まる金髪と、同じ光を溶かし込んだ、ストレートティーのような瞳を持つ見知った顔が私を静かに見ている。

「平気か」

「…いつも通りよ」

穏やかな瞳がずっと伏せられて、目の前の彼の顔に睫毛の影が落ちた。それがついさっき眺めていた夕焼けと変わらない美しさで、だからこそ出来過ぎていて虚しい。

「いつも通り、かよ」

彼は自嘲したようだった。私は気付かない振りをする。彼は何も言わない。私は、安っぽい慰めの言葉が彼の口から漏れるのを聞いたことがない。代わりに彼は恐ろしく静かな思想に沈むように、遠くを、今ならば夕日を見つめて、あたかもそこから答を導き出そうとするかのようにゆっくりと目を細める。

彼は知らない。その仕草を見て私が何を思つかを。

その存在に、確かに私が繋がれていることを。

「里雪」

リユキ。それが彼の名だ。しんと積もる無限の雪景色、その下に埋もれているものを誰も暴けない。

すっとかき混ぜたように紅茶色の目が涼しく揺れて、視線が交差する。

二、不完全な神は

「いつも通りよ。いつも通り、何も無かったように過ぎていくわ」
リクの死も。裁く者がいなければ、償いも言い訳もない。もとより死神による殺生は罪ではないのか。

日の落ちかけた空が光の名残を惜しんで、不可解なグラデーションを描く。絵の具を散らせたような無機質な星と下弦の月、下方に帯状に広がる橙色。それでも再び日が上がるように、生命も混沌と廻っていく。

それならば何も、私が死神である必要などない。でなければ死神に感情など要らない。けれどどちらにも叶わぬ相談。

手を下す対象に心を寄せても、結果は変わらない。

生者であつたリク。

死神である里雪。

等しく遠いふたり。

「殺しが嫌なら、俺がやってやるよ」

背を向けて置き去られた言葉は、内容と不釣り合いに柔らかな口調だった。私に命を明け渡したリクと、私の罪惡を丸ごと引き取ろうとする里雪。私がそれに値する存在かどうか、天秤に掛け直せば正しい答が出るはずなのに。

誰か私を裁いてくれないか

里雪の背中を見送った後、落ちた太陽に囁きかける。不毛な行為だと気付いている。

生かしたかった

脳裏に刻まれているのは、最期に挑発するように笑ったリクの顔。都会の荒んだ空気を重たげに払う茶髪。イルミネーションが交錯する背景がよく似合う少年だった。

「オカルトに興味ねーんだ。まして死神なんてなおさら興味がねえ。言葉と裏腹に私を真っ直ぐに見て、リクはそう言った。」

私は知っている。彼が探していた狂気と真理を。俺、あんたが死神でも嘘つきでもどっちでもいいから。いつだったかリクはふと思いついたように零した。死ぬことなんて何とも思っちゃいない。あんたは、なんでもか大真面目な顔してるけど。気楽な調子で言われたそれは、別れの挨拶に似ていた。責めないから。そんな約束欲しくもなかった。

人の一生は始めから決まってるって、死神はその通りに管理する。だからリクのこと、定められたシナリオに従っただけのことだ。それが死神の言い分だ。

けれど私は死神の存在そのものを信じる事が出来ない。

命を操作出来る方が、優れている？冗談じゃない。驕って見落とすものがあるくらいなら、そんな権利は要らない。死をもたらす正当性を私は主張出来ない。

『死神』が、聞いて呆れる。

三、狂気と真理

あんだ、名前は。

刻まれた記憶には、もう既にフィルターが掛かり始めている。思い出の中でリクはただひたすらに美しい。

名前ぐらい言っただって構わねーだろ。

私の沈黙をリクは笑って許した。

ま、いいや。

愉快そうにそう言っただけだった。留めた笑みのまま夜の街を振り返った彼の茶髪に、雑多なネオンの色が滑る。つまらない街だと彼は言ったが、その街は間違いなく彼を引き立てていた。散らばった光の中で、彼の乱雑な振る舞いが映える。しかし傍目にいくら魅力的に映るうが、リクはいつもその照明を持て余すように脇道に入っていた。閉鎖的な路地がどこより落ち着くらしかった。

影を落とした横顔はまるで、まだ見ぬ映画のワンシーン。

心の底であの影が晴れることを望んでいた。

彼を抱きしめる腕を持つひと。

叶わないと確信が深まるほど、その祈りは反比例する。

逃げ切る力をくれるひと。あなたがいたなら。

季節が過ぎても、時の概念が無い死神は感傷には浸らない。リクの死も過ぎ行く日々の一片でしかない。そんな論理で何が救われるでもない。移り逝く時の外で、私は彼の影を追う。

彼が欲しがっていたものが、とてもささやかだったことを私は知っている。

死ぬことなんて何とも思っちゃいない。その言葉の下に隠して、いつの間にか忘れてしまったものは決して、価値のないものなんかじゃない。

この辺で殺されとくのも、手間が省けていいな。リクがそんな風に思っていたことを知っている。

生きてても死んでも大した変わりはない。

冷めた目で生きていたことを。

そうして彼の望み通り。

OK。そう言いたげな笑みを湛えて後ずさり一歩しなかったことも。

彼は知らない。私の左手が震えていたことを。息を無くした彼の側で、蹲ることさえ出来なかったことを。

四、雨墜ちる刹那

死神がどこへ帰るのか。そんなことはさして重要ではない。私に取って重要なものは、今、太陽の落ちきった暗闇の中にある。

誓いを立てよう。戦うと。リクの二の舞いを踏むなどもう。だからこそ。

自らの世界と戦う必要がある。死を掲げる権利も、死を伴う正義も信じていないのだから。これ以上このエゴに満ちたぬかるみに足を取られてはいけない。

簡単なことだ。死神の役割を放棄することだ。仲間であつたはずのもはや仲間ではない死神たちと戦うことだ。我々は高等な神ではないと主張して。そうして全てを失っていけるなら、それで結局私は救われる。そう、もしも万が一、全てを失うことが出来るならば……。

死神が帰る場所は、生と死の挟間。ひたと闇の降りたその挟間に、金の髪を持つ青年が溶け込んでいる。

「里雪」

彼の名を囁いた。言わなければいけないのかもしれない。

私はもうあなたの仲間ではない。戦うことにした。全てと。

しかし私が先を続ける前に振り向いた里雪は、どこか諦めの混じつたような瞳で微笑んだ。

「わかった」

好きにしるよ。

罵られるより理解される方が苦しい。責め立てられるより許される方が痛い。それが矛盾ではないと分かるだろうか。

私は馬鹿げた死神の世界を壊そうとしている。同じ世界に所属する里雪はそれすら否定しない。或いは彼に破壊願望があるのか。どうでもいいと思えるほど既に絶望しているのか。いずれにせよ用意されたものは、もはや不毛な答でしかない。

果てない夜を。死神に死を。見上げた闇の先で妖しく霞んだ銀の月が、雲に捕われる。

四、雨墜ちる刹那（後書き）

続編連載中です。

N e X T 「神話21世紀」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091c/>

果てない夜、主題は銀の月

2010年10月9日01時33分発行